

サトリの  
ココロ

多くの人が孤立感、生きにくさを感じる今、  
仏教に興味を持つ人が増えています。  
僧侶に聞く、弱い自分と向き合う方法——

日蓮宗蓮乗寺住職  
木藤養顕さん

第24回

昨年3月11日、寺で法事を行っていた最中に地震がきました。今までに経験した中で一番大きな揺れ。燭台が倒れましたが、そのまま法事を続けました。そこに最初の余震。「これはヤバイ」「津波がくるから逃げたほうがいい」……すぐに避難を促しました。

寺は少し高台になっているため、すぐに70人ほどが避難してきました。みんなを高台に引き上げたところで、津波がきました。電柱は折れ、家が流されてきて寺の山門に突っ込む……本当に悲惨な状況の中、溺れている人を何人かで見

けたりもしました。「本堂は無事でよかったです」そう思ったとき、流されたプロパンガスが爆発して、廃材や車などに引

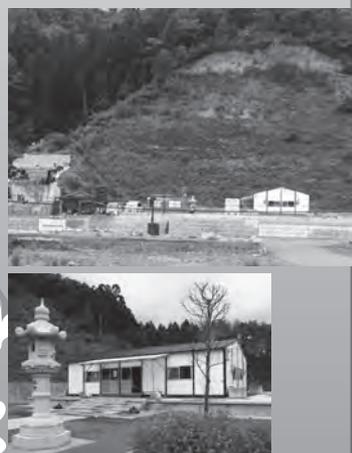
火。大きな火災となり、本堂も全焼してしまいました。

落ち込んでいるヒマはない  
自分にできることをやる！

火災がおさまるのを待つて、翌朝から避難所へ。私は避難所から寺へ通いました。当時は寺もガレキの山。それでも4月18日にプレハブの仮設本堂を建てました。5月の連休には、全国から集まってきたボランティアさんたちがガレキを撤去してくれて、犠牲者供養も行えるようになりました。

大変でしたが、落ち込んでいるヒマなどありませんでした。悔やんでも焼失したものが戻るわけはありません。寺の檀家さんでは161人もの方が亡くなりました。開業直前で流された病院もあるし、家を新築して一晩で失った人もいます。悔やみきれない人がたくさんいました。そんな中で「自分が何をしなければいけないか」という思いだけが先に立ち、行動していたように思います。

最初のころは、ただ話を聞いてあげることしかできませんでした。何を言っても心の傷は埋められま



上・蓮乗寺周辺は津波と火災によって住宅や建物が全壊。街が跡形もなく消えた。下・プレハブの仮設本堂で供養を行う。

せん。時間が解決することもある、そう思っって耳を傾けました。まだ立ち直れない人もいますが、1周忌を過ぎたころから、みなさん少しずつ吹っ切れたように感じることが多くなりました。供養を重ねていくことに、自分の気持ちも落ち着いていったのかもしれない。私も、寺はプレハブになりましたが、本堂で仏様と1対1で向き合うとき、建物や環境は関係ないのだと感じています。

「忘れたいけどほしい」が  
被災地みんなの願いです

大震災から約1年半経ちますが、まだまだ復興と呼ぶにはほど遠いのが現状です。数年でどうにかなるものではないということもわかっています。だからこそ長い目で見て、少しでもいいから心に留めておいてほしいのです。ただ記憶に残すだけでもいい。もし機会があるなら、見に来るだけでもいいから来てほしい。そして、関係性を持つことがあれば、それに手を貸してほしい。被災地のことを忘れられることが、私たちに一番辛いことなのです。

被災地のことを少しでも  
心に留めておいてください

きとう・ようけん 1960年、岩手県大槌町生まれ。1983年、早稲田大学卒業。群馬県前橋市で中学校の体育教師として3年間勤務した後、教員を退職。立正大学で学び僧籍を得る。その後は大槌町に戻り、釜石にて高校教師に。2004年より蓮乗寺の住職となる。2011年3月11日の東日本大震災では津波のあとの火災で本堂が全焼。現在はプレハブの仮設本堂で法務を行う。